

最果てより

あらすじ

2015年、夏。和歌山県串本町に住む中学3年生の玉置渉（15）は進路選択に悩みながらも、両親が営むビラ『ベスパ南紀白浜』の手伝いをしている。

表向きは大人びて、要領よく振る舞うが、内心では地元に縛られたままでは何者にもなれないという焦燥感、外の世界への好奇心を抱いていた。

ある日、東京からの宿泊客、江國美里（18）からトラブル対応の連絡が入り、渉は現場に急行する。しかし、現場では美里が一人でトラブルを解決しようとしており、結果、海に落ちてしまう。渉と美里は焚き火を囲みながら言葉を交わし、二人は距離を縮めていく。

後日、偶然再会した渉と美里は夕食を共にし、互いの家族や悩みについて少し打ち明ける。その際、美里から渉に串本を案内してほしいと頼む。渉は悩みなが

らも美里の存在が自身の決断を促すものだと考え、頼みを引き受ける。

水族館、海中展望塔、橋杭岩を巡り、二人の距離感は一層に縮まり、渉の決断にも変化が生まれつつある。だが同時に渉は美里が秘密を抱えている事を察する。

橋杭岩からの帰り道、渉は酩酊状態の江國大希（40）とすれ違い、違和感を覚える。渉はベスパ南紀白浜へ侵入し、そこで、江國が美里に対して、性的虐待を行っている現場を目撃する。

美里の秘密を知り気落ちしていた渉はこれまで先延ばしにしていた進路についても玉置春香（45）から強く問い詰められ、心が限界に達する。

そんな夜、マーケット三好の店員、畠きみよ（70）にカップ麺を奢ってもらう。きみよと話す中で、渉がすべき決断と、自身にとっての美里の重要性を再確認する。

美里の串本最終日、渉は美里を中学校に

誘い、雨の中、走り高跳びをする。そこで渉は、何度も跳ぼうとする美里の姿を見て、美里は答えを出さない曖昧さに甘えているのではなく、現状を打破しようともがいていると知る。渉、自身が中々決断できなかった経験を重ね、美里が現状を打破するまで、付き添うことを宣言する。

1年後、高校生となった渉がベスパ南紀白浜で手伝っている中、一人の宿泊客が訪れる。

人 物

玉置 渉（15）串本中学校3年生

江國 美里（18）ベスパ南紀白浜の宿泊客

江國 大希（40）ベスパ南紀白浜の宿泊客

畠 きみよ（70）マーケット三好の店員

玉置 耕一（45）渉の父。ベスパ南紀白

浜のオーナー

玉置 春香（45）渉の母

斉藤 純平（15）渉の友人

花園 幸太郎（15）渉の友人

林 祐介（40）ベスパ南紀白浜の職員

五木 宗徳（50）ベスパ南紀白浜の職員

松本 亮介（30）串本中学校の教員

○串本海中公園・海中展望塔・中

青光りの照明の下に一つの舷窓。

舷窓の先には、岩礁が見える。

○和歌山県西牟婁郡白浜町・白良浜

蝉の鳴く声。

白い砂浜に青く澄んだ海。

海岸は多くの観光客で賑わっている。

○南紀白浜空港

青く澄み渡った空から一機の旅客機が

空港へ着陸する。

○ベスパ南紀白浜・全景

人気のない緑地の中に、一際目立つ巨

大なコンクリート構造物。

○同・寝室

よれた半袖シャツを着た長身の玉置渉

(15)。

大人びた表情をしながら丁寧にベッドメイキングをしている。

○南紀白浜空港・ロータリー

一台の黒光のハイヤーが停車中。

ハイヤーの横には、スーツ姿の五木宗徳（50）。

○ベスパ南紀白浜・寝室

渉、ベッド横のゴミ箱を片付ける。

ゴミ箱から取り外した半透明のゴミ袋

の中には、ピンク色のコンドーム。

渉、少し吐き気を催す。

○南紀白浜空港・ロータリー

五木、突然、表情が明るくなる。

五木「お待ちしております。江國様」

○ベスパ南紀白浜・リビング

コンクリート打ち放しのリビング。

壁四面の内、一面は全面ガラス張り。
ガラス張りの先には広々としたコンク
リートのアラと水平線が広がる。
渉、ガラス張りの窓を拭きながら、水
平線を見つめる。

リビングに白色のワイシャツを着た林
祐介（40）が入って来る。

林「終わったかな？」

○県道34号線

ハイヤー、山間部を走っている。

○ハイヤー・外

ハイヤーの後部座席の窓が開く。

窓から、白く細い江國美里（18）の
左腕が伸びる。風圧に抗いながらも、
美里の腕は風を感じている。

○同・中

助手席に座る江國大希（40）、後部

座席に座る美里に向かって、

江國「美里、それ危ないから」

美里の声「はい」

○同・外

美里、左腕を車内へ引っ込め、窓が閉
まって行く。

○バス 南紀白浜・リビング

渉と林、手元にあるチェックシートを
見ている。

林「スパの備品は？」

渉「補充しました」

林「今日の朝刊は？」

渉「そのテーブルに置いています」

林「オーケー。焚き火用の薪は？」

渉「……まだですね」

○紀勢自動車道

ハイヤーはトンネルの中を走る。

○ハイヤー・中

薄暗い車内。

五木、江國と雑談を交わしている。

五木「（関西弁で）そうなんですね。ちなみに、当館のご利用は初めてですか？」

江國「はい。以前、知人に教えてもらって。

体を労ってあげる機会だと思って」

五木「そうでしたか。当館は『時をゆつくり』をコンセプトに運営しておりますので、江國様のご希望に沿えるかと」

江國「それは最高ですね。でも、仕事が山積みな状態で、ため息が出ますよ」

五木の声「そりゃー大変ですね」

○ベスパ南紀白浜・リビング

渉、新聞が置かれたテーブルの横を通り過ぎる。新聞の日付は『2015／07／23』。

○ハイヤー・中

薄暗い車内。

五木「東京は競争が激しいですからね」

江國「本当ですよ。一日で世界が目まぐるしく変わる。ついて行くので精一杯です」

窓に映る美里の顔は真顔のまま、江國をチラッと一瞬見る。

五木「そうですよねー。うわー大変や」

○ベスパ南紀白浜・外庭

渉、汗を垂らしながら、薪を割る。

○紀勢自動車道

ハイヤーはトンネルを抜け、明るく視界が開けた山間部へと出てくる。

○ハイヤー・中

車内が明るくなる。

美里、窓から上空を見上げる。

○ベスパ南紀白浜・外庭

薪に雫が滴り落ちる。

渉、上空を見上げる。

○ハイヤー・中

フロントガラスに雨粒が数滴落ちる。

五木、上空を見上げる。

○ベスパ南紀白浜・外庭

激しく雨が降り始める。

渉、割った薪を屋根付きの薪置き場へ

と駆け足で持つて行く。

○ハイヤー・中

車体に雨粒が激しく叩きつける音。

江國「……本格的に降ってきましたね」

五木「ですね。雨降ると外に出られへんです

からね。止むとええんですけど」

○ベスパ南紀白浜・テラス

テラスに大量の雨粒が弾く。

○同・リビング

渉、タオルで身体を拭きながら、テラスの先に広がる水平線を見つめる。

○山道

雨の中、山道を走行するハイヤー。

○ベスパ南紀白浜・駐車場

渉、合羽を羽織っている。

渉の前には右手で傘を差し、左手で閉じた傘を2本持っている林。

林「今日はほんまありがとう」

渉「いえいえ。ちょうど、暇だったので」

林「いや、ほんま助かったで。夏休みも今日みたいにみっちり働いてもらうかな」

渉「勘弁して下さいよ。受験生ですよ、僕」
林「いや冗談やって。流石に中学生に頼りすぎたら、君のお父さんに怒られるわ」

× × ×

渉、自転車に跨る。

渉「じゃー、僕もう行きます」

林「うん、お疲れ」

渉、駐車を後にする。

○山道

自転車を漕ぐ渉。

渉の正面から一台のハイヤー。

渉、道路端へ移動し、自転車を停車させる。

渉、ハイヤーとすれ違う。その際、後部座席に座る美里と目が合う。

渉、通り過ぎるハイヤーを目で追う。

ハイヤー、ベスパ南紀白浜の駐車で停車する。

林、傘をハイヤーから降りてくる美里と江國へ差し出す。

美里、渉の方を振り返る。

渉、我に返り、再び自転車を漕ぐ。

美里と江國、ベスパ南紀白浜の玄関に向かつて歩き出す。
自転車を漕ぐ渉の背中では次第に小さくなっていく。

○串本中学校・全景

○同・教室

黒板に板書する松本亮介（30）。
室内には30名ほどの生徒。
窓際の席に座る渉、黒板を真剣に見つめ、自身のノートに書き写している。

○同・廊下

『3-1』と書かれた教室表札。
チャイムが廊下に鳴り響く。

○同・トイレ

トイレの個室は鍵が閉まっている。
個室の中では渉、斉藤純平（15）、

花園幸太郎（15）がFPSのスマホゲームに熱中している。

斉藤「居た！居た！居た！」

花園「どこ？どこ？」

斉藤「草原のところ、2人居る」

渉「見つけた！あっ……」

渉のスマホ画面に『死亡』の文字。

渉「終わった、ついてない。後は任せたわ」

渉、肩を落とす。

斉藤「任せろ、お前の死を無駄には……」

花園「痛い！痛い！痛い！痛い！」

斉藤「どこ？どこ？」

花園「ここ！ここだって？早く来て！」

斉藤「だからどこやねん！場所言えや」

渉、笑顔で斉藤のスマホ画面を覗く。

○同・廊下

トイレから出てきた渉、斉藤、花園、教室に向かいながら、駄弁る。

渉「もう一戦したら、絶対勝てたな」

花園「いつも最初に死ぬ奴が何言うてん」

渉「いつもちゃうわ。昨日はゾノや」

花園「そうやつけ？なあ、明日もするやろ」

斉藤「明日は無理やで。終業式あるやん」

花園「そうやん、始まるやん地獄が」

斉藤「（失笑しながら）地獄って」

花園「憂鬱や。……そういえば、結局、自分

らどこの夏期講習に行くか決めたん？」

斉藤「勿論」

渉「俺はまだやな」

斉藤「俺は新市の東営にしたで」

渉「商店街の馬鹿でかい緑看板の？」

斉藤「そう」

渉「白良浜の河出とか、駿河の方がええ先生

居るって聞くけどな？」

斉藤「白良浜はさ、何気に遠いやん」

花園「やば、全然、俺決めてへんわ」

斉藤「もう明日終業式やで？間に合うん？」

花園「間に合うやろ？ちなみに東営と河出だ

ったら、レベル低い方はどっちなん？」

渉「そういう時は、レベル高い方聞くやろ」
花園「ちゃうねん、レベル高い所行っても、
ついて行かれへん可能性あるやろ？」

斉藤「お前、根っからのアホやもんな？」

花園「お前、しばくで」

渉、斉藤、花園、談笑しながら歩く。

○同・教室

教室に入室する渉、斉藤、花園。

斉藤「要するに、丁寧な教え方できる先生が
おる方がええんやろ？」

花園「そうやな」

斉藤「ほな今日、作戦会議しようや。勉強の
レベルもそうやけど、ゾノが一番モテそう
な塾はどこか、俺らが見極めてやるわ？」

渉「おっ、ええな」

花園「マジで？だったらさ、女子の意見取り
入れる為に真子とかも呼ぼうや」

渉のポケットの中でスマホが震える。

渉、真顔でスマホ画面を確認する。

斉藤の声「真子はほぼ男やからな、あんまり参考には……」

花園の声「いや、あいつ意外と白浜の都会っ子と関わりあるんやて」

斉藤の声「ほんまに？初耳やけど」

花園の声「ほんまやて。ちよ、真子に聞いて来るわ」

花園、涉と斉藤の側から離れて行く。

涉、表情を変えず、スマホをポケットに仕舞う。

○同・教室（夕）

チャイムが鳴り響く音。

時計は、16時30分を指す。

○同・駐輪場（夕）

涉、スクールバッグを背中に背負いながら、駆け足で駐輪場へ走って来る。
自身の自転車を見つけ鍵を解錠する。

○国道42号線（夕）

渉、海と山々に囲まれた道路を自転車で駆け抜ける。

自転車をしばらく走らせると左手に線路が現れる。

渉、後方からやって来るJR紀伊本線と並走する。

○JR串本駅前（夕）

JR串本駅の前を通り過ぎる渉。

○県道102号線（夕）

踏切の警報音。

渉、踏切が開くのを待つ。

電車がゆつくりと踏切を通り過ぎる。

警報音が止まり、踏切が開く。

渉、再び自転車を漕ぎ出す。

○市道52号線（夕）

傾斜のある坂道を立ち漕ぎしながら、

登ろうとする渉。

大量の汗をかきながらも拭うことなく
坂道を登る。

○サンゴ台住宅街（夕）

閑静な住宅街。

自転車に乗った渉、慣れた様子で入り
組んだ道を走り抜ける。

○渉の実家・全景（夕）

渉、コンクリート打ち放しの一軒家の
前で自転車の速度を緩める。

渉、自転車を門前で停車させる。

○同・渉の部屋（夕）

壁にはカレンダー、本棚には沢山の漫
画が収納されている。

渉、制服を床に置き、半裸になる。

制汗シートで汗を拭く。

渉、机上の2枚のチラシに目をやる。

1 枚目の緑色のチラシには東営の夏期講習、2 枚目の黄色のチラシには三谷の夏期講習の内容が記載されている。渉、引き出しを開く。中には、青色の駿河の夏期講習のチラシ。

渉、机上の2枚のチラシを引き出しの中にしまう。

渉、あくびをしながらクローゼットから白いワイシャツを取り、羽織る。

○同・リビング（夕）

渉、火の起こし方が記載された用紙をラミネートしている。

仕上がりを隈なく確認する。

○同・全景（夕）

リュックを背負った渉、門前に停車させていた自転車に跨り、自転車を走らせ始める。

○市道 52 号線（夕）

渉、傾斜のある坂道を、ペダルを漕ぐことなく風を切りながら進む。

○県道 102 号線（夕）

渉、遮断機が上がった踏切で一時停止した後、左右を確認し、前進する。

○国道 41 号線（夕）

車通りの少ない海岸線沿いの通り。
渉、悠々と自転車で駆け抜ける。

○山道（夕）

渉、山道を自転車で走る。
木漏れ日に目を細める。
自転車を走らせる渉の目の前に、バス
パ南紀白浜の全景が見えてくる。

○バスパ南紀白浜・駐車場（夕）

渉、駐車場に自転車を駐輪する。

○同・玄関・外（夕）

玄関前に来た渉、一度深く息を吐く。

呼吸を整え、インターホンを押す。

インターホンの鳴る音。

室内からは何も聞こえない。

渉、再度インターホンを押す。

インターホンの鳴る音。

室内からは何も聞こえない。

渉、リュックから鍵を取り出し、鍵穴

に差し込み、左に回す。

鍵の開く音はしない。

渉、戸惑った様子でドアノブを回す。

扉には鍵が掛かっていない。

渉「（小声で）……開いてたんかい」

渉、唾を呑み込み、入室しながら、

渉「（弱々しく）失礼します」

○同・玄関・中（夕）

渉、玄関にある靴を確認する。

玄関には備え付けの下駄 2 足のみ。

渉、室内へと入って行く。

○同・リビング（夕）

渉、リビングへ移動して来る。

渉「（大声で）こんにちは、スタッフの者で

す。お客様いらっしゃいますか？」

渉、リビングの様子を見渡す。

机上には空のペットボトル、大学受験

用の赤本が置かれている。

渉、リビングを見渡した後、ガラス張

りの先にあるテラスに目をやる。

○同・テラス（夕）

テラスに移動して来た渉。

焚き火の受け皿に薪が中途半端に置か

れている様子を見つける。

渉、薪の配置を少し整える。

渉「……（大声で）お客様、いらっしゃいま

せんか？トラブル対応で来ました」

渉の耳には波音だけが届く。

渉、テラスの縁に移動する。

テラスの縁に立つ渉、目の前には一面の水平線が広がっている。

渉、水平線を見ながら少し八の字眉になる。その後、視線を少し下げる。

渉、少し驚いた表情をする。

渉の視線の先には、テトラポットの隙間に挟まった書類を取ろうとしている

美里の姿がある。

渉「（声を張りながら）お客様！」

美里、渉のいる方向を振り向く。

渉「危ないので帰って来てください」

渉、美里を手招きする。

美里「（声を張りながら）もうちょつと！」

渉、手を耳元に当てながら、

渉「え？」

美里「（大声で）もうちょつとだから」

美里、テトラポットの上を歩き出す。

渉、美里の行動を見ながら、

渉「（小声で）いや、嘘やろ」

○ベスパ南紀白浜前のテトラポット（タ）

美里、慎重にテトラポットを歩く。

○ベスパ南紀白浜・テラス（タ）

不安そうな表情で見守る渉。

○ベスパ南紀白浜前のテトラポット（タ）

美里、テトラポットの隙間に挟まっている書類を掴む。その後、テラスに居る渉に向かって書類をアピールする。

○ベスパ南紀白浜・テラス（タ）

渉、美里に向かって笑顔で拍手する。

○ベスパ南紀白浜前のテトラポット（タ）

美里、テンションが上がり、飛び跳ねながら喜んでいる。

その直後、バランスを崩し、テトラポ

ットから海へと滑り落ちてしまう。

○ベスパ南紀白浜・テラス（夕）

渉、美里が海に落ちる様子を、口をあ
んぐりと開けながら見届ける。

○ベスパ南紀白浜前のテトラポット（夕）

水面に浮き上がってくる美里。
髪をかき上げつつ、笑顔を浮かべる。

○ベスパ南紀白浜・テラス（夕）

夕暮れの中、焚き火が燃える様子。

美里、バスタオルを肩に羽織り、焚き
火に当たっている。

渉、美里の横で薪をくべる。

美里、渉の慣れた手つきを見て、

美里「上手ですね」

渉「まースタッフなので。できて当然です」
美里「いや、でも難しそう」

渉、手元にあるラミネートされた用紙

を見せながら、

渉「ここに書いてある手順通りにすれば、誰だつて簡単にできますよ」

美里「えーそういうものかな」

渉「……本日は、どちらからいらっしゃったんですか？」

美里「東京の三鷹です。知っていますか？」

渉「……井の頭公園が近くにある？」

美里「そうです！よく知っていますね」

渉「地図を見るっていう悲しい趣味を持って
いるんで。今、初めて役立ちました」

美里「えー別に悲しい趣味じゃないですよ。

博識になれるいい趣味……」

沈黙が流れる。

美里、焚き火に手を伸ばしながら、

美里「いやーにしてもなんであそこで落ちる
んですかね、もうちよつとだったのに」

渉「……そもそもなんで行つたんですか？」

美里「なんでって。……取れそうだったから
ですかね」

渉「でも、トラブル対応でご連絡して下さい。だから、別に取りに行かなくても……」

美里「だって、見つけちゃったもん……」

渉「見つけちゃった？……お宝をですか？」

美里「違いますよ！勉強の息抜きで、散歩していたら海に繋がる細道を見つけただけです。だから、行きました」

美里、渉の顔を見て急に微笑む。

渉、美里の顔から慌てて目を背ける。

渉「……次からはスタッフが到着するのを待って下さい。その時は駆けつけますので」

美里「（頭を下げながら）すみませーん」

夕陽が沈み、辺りが暗くなっている。

渉、辺りを見渡した後、少し焦りながら立ち上がる。

渉「すみません、長居し過ぎました」

美里も立ち上がる。

美里「いえいえ、とんでもないです。火まで起こしてもらってありがとうございます」

渉「いえ、それが私の仕事ですので」

渉、室内へ移動しようとする。

美里「お見送りします」

渉「いえ、お気遣いなさらず」

美里「いえいえ、玄関までは」

渉と美里、室内へと移動する。

○同・リビング（夜）

渉、リュックを背負う。

美里「……すみません、今更なのですが、お名前を伺っても？」

渉「申し遅れました、玉置と言います」

美里「玉置さん、よろしくお願いします」

渉「こちらこそよろしくお願いします。……」

江國様は28日までのご予約ですよね？」

美里「はい。正直な所、何も予定を立てていなくて。やらなくちゃいけないことはあるんですけど」

渉「へーそうなんですネ」

沈黙が流れる。

美里「あーでも、お魚は食べたいですね」

渉「魚？いいですね。確かにおすすめですよ」

美里「地のは食べたくて。ちなみにおすすめのお魚とかあったりします？」

渉「魚の種類ですか？」

美里「はい」

渉、腕を組みながら、

渉「……そうですね。僕は鮎ですかね」

美里「鮎？」

渉「はい、鮎。どこのお店でも新鮮なものが手に入るので、美味しいと思いますよ」

美里「なるほど鮎。胃袋にメモっときます」

渉、苦笑いを浮かべる。その後、思い

出した様に、

渉「……ちなみにお連れ様は？」

美里「父ですかね？今は仕事でいません」

渉「あーなるほど。……お父様。……失礼し

ました、プライベートなことを」

美里「全然、全然。忙しんですよ、あの人」

渉「そうなんですネ。……では私はこれで」

渉、美里へ会釈をした後、リビングか

ら去って行く。

○同・駐車場（夜）

渉、自転車に跨り、一度振り返る。
その後、駐車場から去って行く。

○同・テラス（夜）

美里、焚き火台の前に戻ってくる。
焚き火台の前に座り、しばらく焚き火
を見つめる。

美里、ふと上空を見上げる。その後、
笑みを浮かべながら、

美里「（感嘆する様に）うわー」

美里の上空には、綺麗な星空。

美里、少し悲しげな表情をする。

○渉の実家・全景（夜）

渉の声「ただいま」

○同・リビング（夜）

リビングに入室する渉。

リビングには、晩酌中の玉置耕一（4

5）とシンクで皿洗いをする玉置春香

（45）。

渉「ただいま」

春香「お帰りなさい。遅かったわね」

渉「ああ、うん」

渉、シンクで手洗いをする。

玉置、渉に向かって、

玉置「トラブル対応の件どうだった？」

渉「学校終わってすぐに対応しに行ったで」

玉置「そうか、ありがとうな」

渉「……なんか、テラスの先にテトラポット

あるやん。あそこまで紙を落としていて」

玉置「ほんまか？えらい遠くまで飛んだな」

渉「まー今日風強かったからな」

渉、手洗いを終え、食卓へ移動する。

渉「今日は？」

春香「煮付けやで、好きやろ？」

渉「おお、美味そう。いただきます」

春香「ご飯、おかわりもあるから」

渉「おん、ありがとう」

× × ×

春香、煮付けを食べる渉に向かって、

春香「そうだ、机の上のチラシ」

渉「うん？」

春香「最低限、格好がつくれベルの学校は受けんさいよ」

渉「……」

春香「チラシのやつ、串本中央高校対策の夏期講習がある塾だから。早めにどっち行くか決めんさい」

渉「……はいよー」

会話が途切れ、テレビの音声が響く。

玉置、お酒を片手にテレビに向かってツツコミを入れる。

玉置「なんでやねん」

ご飯を食べている渉、玉置に対して、
渉「……今日泊まっている人なんやけどさ」

玉置、テレビを見ながら、

玉置「おん、綺麗な人やったんか？」

渉、少しむせる。

渉「ちやうわ、確かに女の人やったけど」

玉置「なんや、そんな焦って」

渉「焦ってへんわ。……あの人のお父さん、

金持ちなん？」

玉置「なんやそんな事聞いて。もう支払い終わっているから、そんなこと心配せんでもええやろ」

渉「……何してはる人なんやろうな？」

玉置「さあ、東京で有名な人ちやうか？」

渉「……今度聞いてみてや。何してはる方なんでしょうか」

玉置「なんで俺が聞かなあかんねん。詮索したら、お客様が居心地悪くなるやろ」

渉「……でも、気にならん？」

玉置「……ならんな、別に」

渉「……ならんか」

会話が途切れる。

シンク前に居る春香、渉に向かって、

春香「渉、そう言えば明日の晩御飯なんやけどな……」

○串本中学校・教室

窓際の席で荷物を片付けている渉、教室の窓から校庭を見下ろす。

○同・校庭

数人の男子生徒が飛び跳ねながら、下校している様子。

○同・教室

微笑みながら校庭を見下ろす渉の隣に死んだ顔をした花園がやって来る。

○同・校庭

陸上部が走り高跳びをしている様子。渉と斉藤と花園、校庭の芝生に座りながら、陸上部の活動様子を見ている。

花園「……戻りたいな」

渉「……縄文時代に？」

花園「脈略なさすぎやろ。一年前とかよ」

斉藤「また、過去の話して。昨日決めたや

ろ、これからは前しか向かんって」

渉「……そうや。ゾノ、塾は決まったん？」

花園「おん。純平と同じ所にしたわ。それで

今日、申込書出しに行く、めんどいけど」

渉「そうなんや。白浜の女の子の話は？」

花園「白浜？……あー改めて考えると、別

に新市でええかってなって」

渉「そうなんや。純平も今日、行くん？」

斉藤「そうやで。何？どうしたん？」

渉「いや、なんもない。……俺先に帰るわ」

渉、立ち上がる。

花園「なんやねん、ノリ悪いな。1学期ラス

トの日やで、この時間を楽しもうや」

渉「そんな日に限って、自分で晩飯用意せな

あかんねん」

斉藤「渉の家、お金あるんやから出前でもす

ればええやん」

花園「ほんまよ。渉の家はええな。実質、不
労所得やもん」

渉、ズボンに付いた芝を払いながら、
渉「（小声で）只々、遊ばれているだけや」

斉藤「え？なんて？」

渉、首を横に振る。

渉「なんもない。料理できる男はモテるから
な、じゃあ！」

渉、元気に手を振る。

斉藤「まあええわ。また連絡するから」

花園「同じ塾行こうな、待ってるで」

斉藤と花園、渉へ手を振り見送る。

渉、手を振りながら、斉藤と花園の元
から去って行く。

○ 渉の実家・全景

○ 同・渉の部屋

半袖シャツ、半ズボンに着替えた渉、
引き出しを開ける。

中には3枚の夏期講習のチラシ。
渉、鋭い眼光で、引き出しの中を見つめ、引き出しを閉める。

○マーケット三好・中（夕）

店内は多くの年配客。
店内へ入店して来る渉。一目散で、カップ麺コーナーへ向かう。
渉、カップ麺コーナーに到着する。
棚には、様々なカップ麺。
渉、陳列するカップ麺を眺める。
渉、黄色パッケージのカレー風味カップ麺と緑色パッケージのトマトバジル風味カップ麺を交互に見る。
渉の背後を畠きみよ（70）が通る。
渉、ため息を吐く。
渉の背後に買い物カゴを持った美里が現れる。
美里、渉の肩を叩く。
渉、振り向き、驚く。

渉「うわ！びっくりした」

美里「奇遇ですね、何しているんですか？」

渉「（少し慌てながら）晩御飯を買いに」

美里「また奇遇ですね。私事です」

美里、買い物カゴを渉に見せる。

美里「魚！昨日、玉置さんに教えてもらった

鮎もあります」

渉、美里が持つ買い物カゴを覗く。

買い物カゴには、鰯、鮎、鮑、醤油、

料理酒、みりんが入っている。

渉「豪勢ですね」

美里「でしょ？玉置さんの晩御飯は？」

渉、視線をカップ麺の陳列棚に移す。

美里「（微笑みながら）うわお。不健康」

○国道42号線（夕）

渉、自転車を押しながら美里と歩く。

渉、美里の持つビニール袋を自身の自

転車のカゴに入れる様、指を指す。

美里「ありがとうございます」

美里、カゴにビニール袋を入れる。

渉、美里の歩くペースに合わせる。

渉「……本当にいいんですか？」

美里「スタッフマニユアル的なやつの禁止事項に宿泊客とご飯を食べてはダメって書かれてないんですよね？」

渉「……はい」

美里「じゃーいいじゃないですか」

渉「……今日、お父さんは？」

美里「仕事なんで、不在ですよ」

渉、少し安堵する。

渉「……ちなみに今日のメニューは？」

美里「今日は、刺身と煮付けかな」

渉、少しテンションが上がる。

渉「煮付け！？」

美里、渉の反応に少し驚く。

美里「分かりやすいですね、沸点が」

渉「すみません。でも、好きなんですもん。」

特に、鮎の甘露煮が」

美里「甘露煮？」

渉「はい、甘いのが好きで」

美里「舌が子供なんですネ」

渉「子供ですもん、まだ」

美里「……子供？」

○バス停・旧役場前（夕）

渉、自転車を停車させ、美里と並んで
バス停で待っている。

美里、緊張感のある表情をしている。

美里「ちなみに、玉置さんの言う子供って何
歳までを指すんですか？」

渉「……成人年齢未満までですかね？」

美里「一般的にはそうですね」

渉「どうしたんですか？急に」

美里「……大学生だよネ？」

渉「……え？」

美里「住み込みバイトじゃないの？」

渉「……じゃないです」

美里「何？どう言うこと？」

渉「僕、中学生ですよ」

美里、渉の返答を聞き、黙り込む。

その後、美里は渉の背丈を確認する様に、視線を上下させる。

渉「どうかしましたか？」

美里、渉の声を聞き、我に帰る。

美里「いや、無問題！ちなみに何年生？」

渉「中3です。もうすぐで高一です」

美里「……そう。成長が早いのね」

渉「見てくれただけですけどね」

美里「……断ってくれても良いからね」

渉「……今日のご飯の話ですか？」

渉、無垢な表情で美里へ返答する。

バス停にバスが近づいて来る。

渉「あっ、来ましたよ」

美里「あっ、うん」

バス停にバスが停車する。

美里、カゴの中からビニール袋を取り

出し、バスに乗り込もうとする。

美里、振り向き、渉に向かって、

美里「私、結構大食いだから。ね？」

○バス・中（夕）

美里、バスに乗り込み、一番後ろの座席に座る。

○バス停・旧役場前（夕）

バスが発車する。

渉、バスの行く先を見つめる。

スマホの通知音が鳴る。

渉、画面を確認する。

春香から『結局どっちにするの？』の

メッセージ。

渉、スマホをポケットにしまう。

渉、再度、バスの行先を見つめる。

○国道41号線（夕）

信号が赤から青に変わる。

バスが前方に進み出す。

○バス・中（夕）

美里、バスに揺られながら、単語帳を読み込んでいる。

美里、バスの後方を一瞬確認する。

美里、視線を前方へ戻そうとするが、二度見する。

美里、目を見開く。

○国道41号線（夕）

自転車に乗った涉が、懸命にバスを追いかけている。

涉、真剣な表情をして、汗をかきながら、自転車を漕いでいる。

○バス・中（夕）

美里、涉の姿を見て、くすりと笑う。

その後、美里は後部ガラス越しに涉に対して手招きをする。

美里、満足げに前を向く。

○国道41号線（夕）

陽炎の中、自転車に乗る渉が前方を走るバスを追う。

○バス停・出雲浦（夕）

『出雲浦』のバス標識。

バス停にバスが停車する。

美里、降車し、辺りを見渡す。

○国道41号線（夕）

渉、海岸沿いの通りにて懸命に自転車を漕ぐ。

○バス停・出雲浦（夕）

美里、単語帳を読みながら、バス停のベンチに座っている。

数秒後、美里は大きく手を振り、ベンチから立ち上がる。

渉、バス停に到着する。

渉、息を切らしている。

美里「（笑顔で）いやーすごいね、君は」

渉「（息を切らしながら）何がですか？」

美里「来てくれてありがとう」

渉「こちらこそ、誘って下さり、ありがとう

ございます」

美里「じゃー行こうか」

渉「はい」

渉、自転車を押しながら、美里と横並びになり、山道に向かって歩き出す。

美里「下の名前なんて言うの？」

渉「涉って言います」

美里「涉、いい名前だね」

渉「美里さんですよ、下の名前」

美里「よく覚えてたね。……なんかいよ、すごく楽しいよ、今」

○ベスパ南紀白浜・全景（夜）

○同・キッチン（夜）

美里、アイランドキッチンに食材の入ったビニール袋を置く。

渉「何か手伝えることないですか？」

美里「うーん、そうね。とりあえず、手が必要になったら、声かけるからそれまでゆっくりしていいよ」

渉「いや、食材切るでもなんでも……」

美里「いいから、いいから。学校あったんでしょ？ ゆっくりしていい」

○同・リビング（夜）

渉、ソファに座り内装を見渡す。そして、ため息を吐く。

渉「（独り言で）無駄に豪華やで、ほんま」

○同・キッチン（夜）

美里、慣れた様子で魚を捌く。

美里、リビングに向かって、

美里「（大声で）渉くーん！ 出番だよ。……」

聞こえてんのかな」

○同・リビング（夜）

渉、ソファでいびきをかきながら、寝ている。

リビングに来た美里、渉の姿を見て、
美里「（関西弁で）ゆっくりし過ぎやな」

○同・テラス（夜）

たくさんの星々が輝いている。

○同・リビング（夜）

渉、よだれを拭きながら目を覚ます。
数回瞬きをし、勢い良く起き上がる。

○同・ダイニング（夜）

美里、料理をテーブルに置いている。
渉、頭を掻きながら、入室して来る。

美里「おーやっと起きた？」

渉「すみません、寝ていました」

美里「知ってるよ、しかも熟睡だったね。さ

あ、いいから早く座って、座って」

渉、頭を下げながら、椅子に座る。

テーブルには、白米、味噌汁、鰯の刺身、鮎の甘露煮、鮑の酒蒸し。

渉、料理を見て目を輝かせる。

渉「これ全部一人で作ったんですか？」

美里「そうだよ。全部、私の手柄」

渉「ありがとうございます。感謝してます」

渉、深々と頭を下げる。

美里「それ止めてよ、楽しく食べる為に作っ

たんだから。さあ……」

美里、手を合わせる。

渉も手を合わせる。

渉と美里「いただきます」

渉、鮎の甘露煮と白米をかき込む。

美里、渉の表情を伺う。

渉、右手の親指を立て、何度もうなづ

きながら、

渉「……完璧です！おいしい」

美里「本当？よかった」

渉「来世でも食べたいくらい美味しいです」

美里「それ褒めているの？」

渉「勿論ですよ」

美里「（笑顔で）よかった、私も食べよ」

美里、鮎の甘露煮を口に入れる。

美里「……私この子を産んでたわ」

渉「（微笑みながら）それ、美味しい時の感想なんですか？」

美里「（微笑みながら）分かりづらいか。いやー、にしても我ながら料理上手だね。お嫁さんに持ってこいじゃない？」

渉「……他のも食べていいですか？」

美里「勿論。食べよー、食べよー」

渉と美里、他の料理にも手をつける。

美里「幸せだね……」

渉「……」

○同・テラス（夜）

テラスの縁に座っている渉と美里。

渉、カップのコーヒーを飲む。

美里「どう？」

渉「（渋い顔で）美味しくない」

美里「（笑顔で）そうだよね、苦いよね」

美里、渉からカップを受け取る。

美里「……門限とかはあるの？」

渉「無いです。今日は親居ないんで」

美里「言っていたね。……私も」

渉「……何時頃帰って来るとかも？」

美里「知らない。和歌山でも東京でも仕事。

好きだよね、本当に。共感不能」

渉「何系の仕事やっているんですか？てか、

そんなにお忙しいんですか？」

美里「んーどうなんだろうね？別に仕事でや

ましい事はしてないと思うんだけど」

渉「……聞けないもんですか？」

美里「……あるでしょ、渉君も親に一つや二

つ聞けない事、言えない事」

渉、思い当たりのある表情をする。

渉「……東京は、ここから一番、離れた場所

ですよね」

美里「一番じゃ無いでしょ、沖縄とかの方が

遠いじゃん」

渉「そういう意味で言ったんじゃないくて」

渉、目の前を指差す。

美里、渉の指差す方向を見る。

目の前には真っ暗な水平線。

渉「北海道や沖縄の近くにはロシア、台湾があるじゃないですか？でも和歌山は……」

美里「和歌山は？」

渉「（微笑みながら）パラオです、パラオ。

この直線上だと、赤道付近にあるパラオが一番近いんです」

美里「パラオ？名前は聞いた事あるけど、どんな国か分かんないなー」

渉「そうですね、僕もです。……和歌山から見える外の景色ってめちゃくちゃ遠くてよく分かんないんですよ」

美里「……そういう意味の遠いね」

渉「はい。だから僕からしたら東京はほぼ異国ですよ」

美里「……外の景色見てみたいの？」

渉「（悩みながら）……そうですね」

美里「あまり思っていないの？」

渉「いやー……」

渉、両手の拳をぶつけ合う。

美里も両手の拳をぶつけ合う。

美里「なるほどね。色々あるわけだ」

渉「そうですね、色々」と

美里「……私でよかったら、お話し聞くよ。

知っている人より知らない人の方が話しやすいことあるでしょ？」

渉「えー、今ですか？」

美里「聞かせてよ。私、人の話聞くの好きだからさ」

渉、美里の瞳を見つめる。

渉「……いや、遠慮します」

美里「えーなんでよ」

渉「……なんか、共有したら、引かれるかもしれないから。だから……」

渉、美里に頭を下げる。

美里「そう。……そうだよね」

渉と美里、目の前の水平線を眺める。

○同・寝室（夜）

渉と美里、寝室へ歩いて入って来る。

美里、ベッドに背中から飛び込む。

渉「おー綺麗」

美里「でしょー。陸上やっていたからね」

渉「え？僕も陸上やっていましたよ」

美里「走り高跳び？」

渉「そうです」

美里「すごいね。こんな奇遇重なる？」

渉「いつまでやっていたんですか？」

美里「高2までやっていたよ。ねえ、渉君も

やってよ」

渉「え？僕もですか？嫌ですよ」

美里「ねー見せてよ」

渉、ベッドを見つめる。

渉「……僕は……マジでいいです」

美里「（不思議そうに）……そう」

美里、ベッドに座る。その後、渉を手

招きし、横に座らせようとする。

渉、ベッドに座る事なく、フローリングに座る。

渉、美里の顔をチラチラと見る。

美里「いつか一緒に飛んでみたいけどね」

渉「こちら辺で言ったら、中学校のグラウンドとかしかないですかね」

美里「そうなのか。……そりや残念」

美里、ポケットからスマホを出す。

美里「そうだ。二日後、空いている？」

渉「……なんですか？」

美里「行きたい所があつてさ」

渉「ちなみにどこですか？」

美里「それはお楽しみだよ。どうかな？」

渉「（迷いながら）……そうですね」

美里「……よし、今回は止そう。また、ご飯食べたくなったらいつでも来ていいから」

美里、ベッドから立ち上がる。

渉、子犬の様な目をしてしながら、立ち上がった美里の顔を見上げる。

美里「今日はもう帰ろう？」

渉「……大丈夫ですか？」

美里「（笑いながら）どう言う意味よ。もう

9時だよ。帰り道、真っ暗」

美里、スマホ画面を確認する。

渉、胸を摩りながら、

渉「……美里さんは未来か過去、どちらかに
行けるとしたらどっちに行きますか？」

美里「ん？」

渉「どちらかにしかいけないとしたら？」

美里「……そうねー」

渉「……」

○ 渉の実家・渉の部屋（夜）

渉、暗がりの部屋の中、無言で、ベッ

ドへ背面から飛び込む。

スマホの通知音が鳴る。

渉、スマホ画面を確認する。

母から『はよ』のメッセージ。

渉、スマホを手に持ちながら、壁にか
かっているカレンダーを見つめる。

○同・渉の部屋

蟬の鳴き声が激しく鳴り響く音。

壁のカレンダーには、7／26に丸印が描かれている。

○同・リビング

春香、ソファでテレビを見ている。

階段を勢い良く降りる足音。

春香、ソファに座りながら、

春香「（大声で）もう行くの？」

渉の声「なんやー？」

○同・玄関・中

渉、リュックを背負い、靴を履いている。

春香の声「（大声で）今日何時帰宅予定？」

渉「（大声で）うん？…夜！」

春香の声「（大声で）だから、何時って聞いてんねん。あと月謝は？いくら必要？」

渉「行つてきまーす」

渉、春香の声を最後まで聞かずに、玄
関から出て行く。

春香の声「……あいつ」

○市道52号線

渉、自転車で坂道を下る。

○JR紀伊本線・中

斉藤と花園、電車に揺られている。

花園「……結局渉はこの夏期講習行かつて
言っていた？」

斉藤「知らんよ。よう分からん奴や」

花園「でもええなよなー、渉は。勉強せんで
も既に頭ええし」

斉藤「ほんま。気になったら調べる強者の習
慣が身に付いているからな。しかも金持ち
やかからなんぼでも取り返しつくし」

花園「……今頃、家でドラマの再放送でも見
てるのかな？」

斉藤「……夏休みの理想的な過ごし方やん」

○県道102号線

踏切の警報音。

涉、自転車に跨りながら、踏切が開くのを待っている。

○JR紀伊本線・中

花園、外の景色を見ながら、

花園「今、おもしろいと思っているドラマ、数年後おもしろいと感じるのかな？」

斉藤「……無いやろ？関西人やで俺ら」

花園「でも歳を取れば考え方は変わるやろ？それと同じでおもしろいも変わるはず」

斉藤、花園と同様に車窓から外の景色を眺める。

斉藤「じゃー俺達の関係性も、歳を取れば変わっていくんや」

花園「……ええ方に変わり続けたいけどな」

斉藤と花園、電車の車窓から踏切で待

つ 渉の姿を見かける。

○ 県道 102 号線

電車が踏切を通り過ぎる。

踏切が開く様子。

渉、再び自転車を漕ぎ出す。

○ JR 紀伊本線・中

斉藤、車窓から外の景色を見ながら、

斉藤「……歳取るとみんな変わるんかな」

○ JR 串本駅前・駐輪場

渉、駐輪場に自転車を停める。

○ バス停・串本駅前

渉、バス停で待っている。

バス停にバスが到着する。

○ バス・中

渉、バスに揺られつつ、最後部座席に

座りながら、英単語帳を読んでいる。

○バス停・出雲浦

『出雲浦』のバス標識。

○バス・中

バスが停車する。

美里、バスに乗車して来る。

白い斑点模様の黒色ワンピースにリュックを背負った美里、渉を見つけニヤニヤしながら、近寄って来る。

美里「受験生、頑張っているかい？」

渉、顔を見上げる。

渉「（微笑み）美里さんも受験生でしょ？」

美里、渉の横に座る。

美里「何読んでいるの？」

渉、手元の単語帳を美里に見せる。

渉「（誇らしげに）受験生のバイブルです」

美里「いいね。私も勉強しよ」

美里、リュックから単語帳を取り出し

読み始める。

渉と美里、会話をせず、各自の単語帳を読み込む。

○バス・外

後部ガラスから渉の後頭部が覗く車体は、前方へと進んで行く。

○国道42号線

バス、山間部の中を走る。

○バス・中

渉と美里、真面目に単語帳を読む。

○国道42号線

バス、トンネルの中を走っている。

トンネルを抜けると、左手に海が見え始める。

渉と美里、外の景色を眺める。

海岸線沿いの道の奥に、白い建物が見

え始める。

美里「あれ？」

渉「そう、あれです」

○バス停・海中公園センター・ロータリー

ロータリーにバスが停車する。

渉と美里、バスから降車する。

渉、進行方向を指差しながら、美里を誘導する。

○串本海中公園・水族館・全景

水族館と書かれた看板。

○同・水族館・トンネル水槽

トンネル水槽には多くの魚。

美里「すごい！公園の中に本当に水族館があるんだ！」

渉「そんな珍しいんですか？」

美里「珍しいよ！都内にないよ、こんなの」
渉「ふーん」

美里「ねえ、じっくり眺めていていい？」

渉「どうぞ」

美里、目を輝かせながら、見上げながら、トンネル水槽を見渡す。

渉、水槽ではなく、微笑みながら水槽を眺める美里を見つめる。

美里、渉からの視線に気づく。

美里「何よ」

渉、視線を水槽に移す。

渉「なんもです」

渉と美里、トンネル水槽を見上げる。

○同・水族館・串本の生き物コーナー

正方形の水槽が整然と並ぶ。

渉と美里、ハクテンハタの水槽の前にやって来る。

美里「見て、この子私とお揃い」

水槽では、黒い肌に白い斑点模様のハクテンハタの幼魚が泳いでいる。

渉「本当だ。狙ったんですか？」

美里「（自信ありげに）もちろん！」

渉「……ちなみに」

美里「うん？」

渉「……この魚、大きくなったら50cmくらいになるんです」

美里「へー、今はこんな小さいのに」

美里、水槽を覗き込む。

美里「名前はなんていうの？この子」

渉「ハクテンハタですね」

美里「ハクテンハタ。……言いくいね」

美里、微笑む。

渉、硬い表情をしながら、頷く。

ハクテンハタの幼魚が泳ぐ様子。

美里「ってことは、双子である私ももっと大

きくなるチャンスあるかな？」

渉「んーどうでしょう？」

美里「もうちょっと真剣に考えてよ！」

渉「だって、此間会ったばかりですし」

美里「それでもだよ。……ちなみにミサトテンハタに纏わる豆知識はなんか無い？」

渉「何ですかそれ？ミサ？」

美里「ミサトテンハタ！この短期間で何か思
った事、感じた事でもいいけど」

渉「ミサトテンハタね……」

渉、腕を組み考える。

渉「ちなみに……」

美里「うん！」

渉、美里の目を見つめる。

美里も渉の目を見つめる。

渉「……ミサトテンハタは、僕と基本的に違
うけど、僕と似て強がりですよね」

○同・人道橋

2羽のカメメが飛行している様子。

渉と美里、海風が吹く中、赤色の人道
橋の上を歩く。

渉、美里の前を歩いている。

渉、後ろを振り向き、美里が追いつく
のを待つ。

渉「ごめんなさい。僕、早いですよね？」

美里「ん？いや、大丈夫だよ。自発的にゆつくり歩いているだけだから」

涉、美里と同じスピードで歩く。

○同・海中展望塔・中

青光りの照明が照らされる中、涉と美里は階段を下る。

階段の先には、たくさんの舷窓。

舷窓からは群生しているサンゴ、ソラスズメダイやメジナ等の魚が見える。

美里、感嘆しながら、

美里「すごい、綺麗。……本当に綺麗」

涉、美里の言葉を聞き、横で微笑む。

涉と美里、舷窓を眺めつつ回遊する。

美里、足を止める。

美里「この子私の推しにする」

涉、舷窓を覗き込む。

舷窓の先には、鮮やかな色をしたフエヤッコダイ。

美里の声「あの黄色の子」

渉「……あれは、フエヤツコダイ」

美里「フエヤツコダイ。よく知っているね」

渉「海人なんで」

美里「（微笑みながら）何それ」

美里、微笑みながらフエヤツコダイを見続ける。その後、渉に向かって、

美里「私、もうちょっとこの子見続けているから、渉君も見たい所行って来ていいよ」

渉「推し活するんですか？」

美里「推しは推せる時に推さなきゃだね」

美里、再び、フエヤツコダイを見る。

渉、美里の横顔に見惚れる。数秒後、我に返り、美里の側から離れて行く。

○同・海中展望塔・中

渉、舷窓を見つつ、廊下を周回する。

渉、ふと足を止め、舷窓を覗き込む、

舷窓の先には岩礁域に居るイスズミ。

イスズミは活発に泳がず、ずっと岩の

隙間に隠れる。

渉「（小声で）……怖いのかな？」

渉、半開きの目で見つめる。

イスズミは変わらず、岩の隙間に隠れている。

渉「（微笑みつつ小声で）……分かるで」

美里の声「何が分かるって？」

渉、美里の音がする方向を振り向く。

振り向いた先には、美里の大きな目が
渉の視界に飛び込んでくる。

渉「（驚きながら）びっくりした」

美里「何が分かるの？」

渉「……いやー、てか推しは？」

美里「推し？居るよ」

美里、舷窓を指差す。

渉、舷窓に視線を戻す。

舷窓の先には岩礁域に居るイスズミの
元に、フエヤッコダイが泳いで来る。

美里、フエヤッコダイに声を当てる。

美里の声「東京からやって参りました、フエ
ヤッコダイです。よろしくお願いします」

渉「（呆れる様に）何それ？」

美里「いいから、いいから」

渉はイスズミに、美里はフエヤツコダ
イに声を当てる。

渉の声「初めまして、イスズミです。よろしく
お願いします」

美里の声「イスズミさん、お願いします」

渉の声「串本は初めてですか？」

美里の声「はい、初めてです。父の仕事の付
き添いできました」

渉の声「そうなんですね。串本はこの岩礁の
様に、何もない街でしょ？」

美里の声「そんな事ないです。魚は美味しか
ったし、海も綺麗です」

渉の声「それが串本の全てです。もう他に見
るものは無いですよ」

美里の声「（笑いながら）酷い言い方。嫌な
ら、外に出ればいいのに」

渉の声「……またその話ですか？」

美里の声「……聞かれて嫌なことですか？」

渉「……中に居ると贅沢な飯が食えるから、嫌なんです」

美里、渉の横顔を見る。

渉の横顔は思い詰めた表情している。

渉と美里、再び岩礁で泳いでいるフェ

ヤツコダイとイスズミに声を当てる。

渉の声「この岩場には運よくご飯が沢山あつて、外に探しに行く必要がないんです」

美里の声「……それはいい事じゃないの？」

渉の声「幼魚の場合はね。でも、成魚になっても岩場の餌を食っていたら、外でどう生きていくのか知ることができないんです」

美里「……実は、私にも欲しいものがあります」

渉、美里の顔を見る。

美里「……こっち見ないでよ」

渉「ご、ごめんなさい」

渉、舷窓に視線を戻す。

渉と美里、再び岩礁で泳いでいるフェヤツコダイとイスズミに声を当てる。

美里の声「簡単に言えば、綺麗な心。難しく
言うと、ピンク色の鮮やかな心臓」

渉の声「……持っていないんですか？」

美里の声「前、未来か過去、どっちに行きた
いか聞いてくれた日があるでしょ」

渉の声「はい」

美里の声「私はね、悲しいことに、想定内を
抱きたくて未来に行きたかったの」

渉の声「……先生、一つ質問いいですか？」

美里の声「どうぞ」

渉の声「想定内と想定外、強いて言えばどっ
ちに遭遇したいんですか？」

美里「……（少し悩み）これは想定外だね」
フエヤツコダイ、岩礁から離れる。

○バス停・海中公園センター（夕）

渉と美里、バス停でバスを待つ。

美里「いい所だったね」

渉「よかったです。楽しんでもらって」

美里「私が渉君を連れてきたんだけどね」

渉「そういえば、そうでした」

渉と美里、優しく微笑む。

渉「……僕、美里さんの行きたい所、全部追
いて行きますから」

美里、渉を見つめがら、

美里「どうしたの急に？」

渉、胸を摩る。

渉「……想定外、悪く無いなって思ってた」

美里「……そう、ありがとう。でも、お互い
に勉強に支障が出ない具合で行こうね」

渉「それは、勿論です」

ロータリーを挟んだ車線にて、一台の

タクシーが減速し、停車する。

タクシーの後部座席の窓が開く。

後部座席には江國が座っている。

江國、美里に向かって、

江國「（大声で）美里？」

渉と美里、タクシーに気づく。

美里「（大声で）お父さん？」

江國「ビラに帰るのか？」

美里「そう」

江國「乗っていく？お父さんも帰りだから」

美里、渉の表情を伺う。

美里「乗ってく？」

渉「僕ですか？いやいや、いいです。遠慮し
ときます」

美里「本当？帰る方向一緒だけど」

渉「いや。…途中で友達の家行かないと行
けなくて。しかも、それ反対方向なんで」

美里「そう？ならいいけど」

美里、タクシーへ駆け寄って行く。

美里、振り返りながら、

美里「じゃーまた」

渉「また」

渉と美里、互いに手を振る。

美里、タクシーに乗り込み、その場を
去って行く。

バス停に残った渉、タクシーを見守り
ながら、その場にしゃがみ込む。

○タクシー・中（夕）

後部座席に座る美里と江國。

江國「……さっきの子は？」

美里「ん？あーこないだ知り合った子」

江國「一緒に乗らなくてよかったの？」

美里「うん。なんか用事があるみたい」

江國「そうか。……父さん、晩御飯食べた
ら、またちよつと外出るから」

美里「……仕事？」

江國「そう、8時くらい。だから、明日の朝
帰るから」

美里「……うん、分かっている」

江國「……にしても、美里は本当に友達作る
のが上手だな。そういう所、尊敬しちゃう
な」

美里、微笑みながら、

美里「そうかな。パパに似たんじゃない」

江國の声「そうかもな。料理上手なところは
ママに似たのかな。……あつ、運転手さん
コンビニに寄るの忘れないでね」

○国道42号線（夕）

タクシーはトンネルへ入って行く。

○渉の実家・玄関（夜）

渉、靴を脱ぎ、ゆっくり階段を登る。

玄関に春香がやって来る。

春香「おかえり。どうだった？」

渉「どうだった？…何がよ？」

春香「夏期講習の説明会に行ったんでしょ。

サインとか必要なら早めに出してよね」

渉「…あー、うん」

春香「…：何度も言うけど、串本中央くらい
行ってくんと、お父さんお母さん、顔立
てられんくなるんやで」

渉、階段を登る足を止める。

渉「…：あのさ、おかん」

春香、渉の語りかけに気付かず、リビ
ングの扉を閉める。

渉、渋々階段を登って行く。

○同・渉の部屋（夜）

蟬と鈴虫が鳴く音。

消灯後の渉の部屋。

渉、ベッドに寝転がりながら、スマホを触っている。

メッセーシアプリを開くスマホ画面。

渉『どんな感じ？』。

斉藤『大したことない』。

花園『え、俺きついですけど……』。

斉藤『wwwww』

渉、無表情で画面を見ている。その後スマホを閉じ、眠ろうとする。

渉「（小声で）はー……」

壁のカレンダーの7／27、7／28に丸印。

○同・リビング（朝）

寝癖を付けた渉が、あくびをしつつ、リビングに入室して来る。

リビングのテーブルの上に一枚のメモと封筒と印鑑。

メモには『月謝代ね』の記載文。

渉、メモを見た後、ため息を吐く。

○JR 串本駅・ホーム

渉、服を仰いでいる。

ホームに電車がやって来る。

○電車・中

渉、電車に乗車し、辺りを見渡す。

端っこの座席に有線のイヤホンをしてながら古びた日記帳に何かを書き込む美里の姿。

渉、美里に近寄る。

美里、近寄ってくる渉の足元に気付き顔を見上げる。

美里、渉の顔を見るや否や、片方のイヤホンを外し、日記を閉じる。

美里「おう！来た来た」

渉、美里の隣に座る。

渉「何やっていたんですか？」

美里「ん？書いた方が覚えられるでしょ？」

渉「電車でも勉強ですか、真面目ですね」

美里、微笑みながら、日記をリュックにしまう。その後、外した自身のイヤホンの片耳を渉の耳に差し込む。

渉、少し驚く。

美里、自身のスマホで選曲をする。

渉、美里に着けてもらったイヤホンを耳奥までしっかりと着ける。

渉と美里、音楽を聴きながら電車に揺られる。

× × ×

渉、リュックの中から制汗剤を取り出し、腕に塗る。

美里、チラッと渉を確認する。その後自身のリュックから渉の制汗剤と色違いの制汗剤を取り出す。

渉「あつ、そっちの匂いもいいですね」

美里、自身の制汗剤のキャップを外し
渉の制汗剤のキャップと入れ替える。

美里「今日だけね」

美里、キャップを入れ替えた制汗剤を
自身の腕に塗る。

渉も再度、制汗剤を腕に塗る。

渉と美里「……さぶ！」

渉と美里、同じタイミングで上空の冷
房機を見上げる。

同時に互いが着けているイヤホンが耳
元から外れる。

○紀伊姫駅・ホーム

渉と美里、電車から降車する。

美里、辺りの田舎景色に興奮しながら
改札に向かう。

○国道42号線

渉と美里、左手に広がる水平線を見な
がら、真っ直ぐな道路を歩いている。

美里、渉の少し後方を歩く。

前方を歩く渉に見惚れている。

渉、足を止め、後方の美里を待つ。

美里、渉に追い付く。

美里「……本当に背が大きいね」

美里、渉を追い越して行く。

渉「……なんですか急に。嫌味ですか」

渉、美里の後を追う。

○橋杭岩

一面には沢山の岩柱と多くの観光客。

美里、橋杭岩を前に、目を輝かせる。

美里「すごい、写真より迫力あるね」

渉、美里の表情を優しく見守る。

美里、自身のスマホを取り出し、

美里「ねえ、写真撮ってよ」

美里、渉へスマホを預ける。

渉「いいですよ、どこで撮りますか？」

美里、写真を撮る場所を探す。

美里「ここかな。ちよつと待って、髪の毛」

美里、手櫛で髪を整える。

美里「いいよ、撮ってー」

美里、元気な表情から大人びた表情まで多くのポージングを取る。

渉、苦笑いを浮かべつつ写真を撮る。

美里「ありがとう。いいの撮れた？」

渉「どうかな？」

渉、スマホの画面を美里に見せる。

美里「……うん、満足。ありがとうね」

渉「いえいえ」

美里「渉君のも撮ってあげるよ」

渉「えっ、僕ですか？僕はいいですよ。いつ

でも来れるし」

美里「いいからいいから。記念に」

美里、渉が持っているスマホを半ば強引に奪い取る。

渉、渋々岩柱の前に立つ。

美里、スマホを構える。

渉、硬い表情でピースをする。

美里、シャッターを押さず、不満そう

に首を捻る。

渉「……撮らないんですか？」

美里「楽しくないの？」

渉「……楽しいですよー」

美里「じゃーそれを表現してよ」

渉、首元を搔く。その後、人が変わった様に、元気な表情でポーズを取る。

美里「いいねーいいよー。その調子」

渉、口角を最大まで上げる。

美里、連続でシャッターを押す。

美里「オッケー。いい写真撮れたよ」

渉、美里の声を聞くや否や、表情が落ち着かせ、冷や汗を拭く。

渉、美里が見せてくるスマホを覗く。

美里「どう？」

渉、自身が写っている写真を見て、苦笑いを浮かべる。そして、胸を摩る。

○橋杭岩

渉と美里、低い岩柱によじ登り、岩柱

の上に座る。

風が靡き、波が押し寄せる。

渉と美里、互いの髪が崩れる。

美里「ここでは、髪型を整えるという概念が必要ないね」

渉「（微笑みながら）確かに」

渉と美里、崩れた髪型を整える。

美里「……にしても、落ち着くねー」

渉「……」

美里「……串本、いいね」

渉「本当ですか？……嬉しいかもです」

美里「かもって。嬉しいですでいいじゃん」

渉「いやー、別に串本の全てが好きな訳じゃないんで」

美里「え？そんなことまで考えるの？」

渉「……逆に考えないんですか？どこまで好きなら好きと言って良いのか？じゃあ、嫌いはどこから言って良いのか？」

美里「……本当に15歳？すごいねー、お姉さん尊敬しちゃうよ」

渉「ちよつと、話、ずらさないでくださいよ。最近、真面目に考えたんですから」

美里「ごめん、ごめん。そうねー……」

渉「……」

美里「……私は考えない、いや正確には考えたくない。……疲れるから」

渉「……白黒はつきりつけない方が嫌じゃないんですか？」

美里「（半笑いで）え？だって黒って言われた場合、私の今までは何だったのってなるくない？どうしようもできなくない？」

渉「……」

半笑いの表情の美里。

美里「……正直、黒を白に戻す体力は無いしどうせ真っ白には戻らないよ。だったら、一生グレーを纏って生きていくでいいよ」

渉「……」

美里「……あと食べて行くためには、無駄になるから。決め切るっていう行為は」

大きな波が岩柱にぶつかる。

水飛沫が渉と美里に当たる。

渉「（小声で）……すみません。僕、余計な事を聞きましたよね」

美里「いやいや、全然余計じゃない。……気にしないで」

渉と美里の間に沈黙が流れる。

○橋杭岩（夕）

夕陽を前に岩柱に座る渉と美里。

周囲には、多くの観光客。

渉、一度深く呼吸をし、立ち上がる。

渉「……そういえば、向こうにアイスクリーム売ってましたよ。食べますか？」

美里も大きく息を吐き出す。

美里「……食べますか！」

美里、勢い良く立ち上がる。

渉「一個をシェアします？」

美里「いや、私食いしん坊だから、一人一個ずつにしよ」

渉「（笑いながら）晩御飯食べられます？」

美里「（笑いながら）余裕だよ」

渉、先に岩柱から降り、岩柱から降り
ようとする美里に手を伸ばす。

○山道（夜）

自転車を押す渉、美里と横並びで歩い
ている。

美里「わざわざ送ってくれなくてもよかった
のに」

渉「いいんです、いいんです。その方が個人
的には、都合がいいので」

渉と美里、並んで歩く。

美里「……わざと？」

渉「（首を傾げながら）……何がですか？」

美里「ううん、何も？」

渉と美里、奥へと歩みを進める。

○ベスパ南紀白浜・玄関・外（夜）

渉と美里、玄関前に立っている。

美里「今日も本当にありがとうね」

渉「いえ、僕が好きでやっていたる事なんで」

美里「……そう、ならよかった」

渉「……明日に帰るんですよね？」

美里「そうね、5時くらいにの予定」

美里「……まあ、お昼会うしね」

渉「そうですね。（小声で）……昼があるん

で」

美里「……明日なんか用事あるの？」

渉「いや、全然。明日は美里さんと会う以外

は何も。明日、精一杯楽しみましょう」

美里「そうね。ラスト串本を。……じゃあ」

渉「じゃあ」

美里、笑顔を作り、手を振りながら、

玄関の中へと入って行く。

玄関の扉が次第に閉まって行く。

玄関の扉の隙間から見える美里の表情

は、笑顔から真顔へと次第に変わって

行った。

玄関の扉が完全に閉まり切る。

渉、数秒間玄関前で立ち尽くす。

○山道（夜）

自転車を押しながら山道を歩く渉。

渉、足を止め、何か思い出す。

渉「忘れてたな、キャップ直すの……」

渉の正面から一台のタクシー。

渉、道路端へ移動する。

渉、タクシーとすれ違う。

後部座席には酩酊状態の江國。

江國、猟奇的な目つきをしている。

江國を乗せたタクシーは、渉の横を通

り過ぎ、遠く離れて行く。

渉、胸を摩りながら、込み上げる吐き

気を口元で堪える。

吐き気を抑えるため、大きく唾を飲み

込む。そして、自転車に跨り、ペダル

を漕ぎやすい位置に調整する。

○ベスパ南紀白浜・駐車場（夜）

酩酊した江國、タクシーから降車し、

千鳥足で玄関へと向かう。

○ベスパ南紀白浜・玄関・中（夜）

江國、鍵を解錠し玄関に入ってきて来る。

江國「（声を荒げながら）おい、帰ったったで。どこやー、どこにおる！」

江國、鍵を閉め室内へと入って行く。

○山道

木々の間から月が覗く様子。

鈴虫と土を踏む足音が響く。

○渉の実家・リビング（夜）

ソファには頭を抱えている春香。

春香の横には、缶ビールを手に電話をかけている玉置。

玉置「あーご苦労さん。もうそっち出た？
：何、またあの山道、ダイエットがてら歩いて帰ってんの？」

玉置、缶ビールを一口飲む。

玉置「うん、今日は車？じゃあ、一つ提案ありまして、家帰ったら、車を置いて、いつもの店に集合しましょう」

春香、玉置を睨む。

玉置、春香の視線に気付くことなく、上機嫌で、

玉置「大丈夫、大丈夫。日は跨がんようにしますけ。行きましようよー、ねー」

○ベスパ南紀白浜・玄関・外（夜）

玄関の前に一人の人影が現れる。

○同・玄関・中（夜）

外から鍵がゆっくり解錠される様子。

だが、誰も入室して来ない。

数秒後、ドアノブがゆっくりと動き始め、隙間が次第に広がる。

隙間からは真顔の渉の表情が覗く。

渉、足音を立てずに、静かに玄関の扉を閉める。

渉、玄関にある靴を確認する。

美里の外履きと江國の外履きの2足が置いてある。

渉、大きく唾を飲み込み、足音を立てず室内へ入って行く。

○同・廊下（夜）

渉、音を立てず、廊下を歩く。

渉、廊下の先のドアに到達する。

渉、ドアの一部がガラスになっている箇所から室内の様子を覗く。

リビングには、人影が見当たらない。

渉、廊下の壁にもたれながら、眉間に皺を寄せる。

もたれた壁越しに、微かな人の声が聞こえてくる。

渉、壁にもたれかかりながらしゃがみ込む。

数秒間、その体勢で静止する。その後大きく息を吸い、静かに吐く。

渉、しゃがみ込みながら、ドアのガラス箇所から見えるテラスを見る。
渉が見る景色は、テラスのコンクリート床面と夜空で二分割されている。

渉「（小声で）白か黒か……」

渉、胸を摩る。その後、ゆっくりとドアノブに手をかける。

渉、目を瞑る。そして、ドアをゆっくりと少しだけ開ける。

ドアの隙間から江國の激しい息遣い。渉、舌打ちをする。

○同・寝室（夜）

江國、荒い息を吐きながら、性行為をしている。

性行為の相手は美里。

美里、真顔で対応している。

江國「（呂律が回らず）本当にそっくりだ。生まれてきてくれてありがとう」

美里「……」

江國、激しく性行為を続ける。

○同・廊下（夜）

渉、しゃがみ込んでいる。

ドアの隙間からは江國の息遣いと唸り声が聞こえ続けている。

渉、ポケットからスマホと有線のイヤホンを取り出す。

電車で美里に着けられた耳と同じ耳にイヤホンを差し、音楽を聞き出す。

渉、体育座りをし、俯く。

○同・テラス（夜）

星々が輝いている夜空。

○同・寝室（夜）

パンツを履いた江國、シーツが乱れたベッドから立ち上がる。

美里、真顔で横たわっている。

○同・リビング（夜）

パンツ一丁の江國、テラスを見ながら
水を飲む。

水を飲み終え、寝室に戻ろうとしたと
ころで、廊下のドアが開いている事に
気づく。

江國、廊下のドアを閉めに行く。

江國、ドアの隙間を確認するが、廊下
には誰も居ない。

江國、ドアを閉める。

○渉の実家・全景（夜）

○同・玄関（夜）

渉、無言で靴を脱ぎ、階段を上がる。

春香、リビングから鬼の形相をして出
てくる。

春香、渉の肩を強く握り、階段から引
き摺り下ろす。

渉「（少しキレ気味で）なんやねん」

春香「（激昂する様に）何やねんって逆になんやねん。あんた、夏期講習は？」

渉「……明日、その話するから」

春香「明日もどうせ逃げるでしょう。純平君ところから筒抜けだがらね。あんたが塾に入会すらしてないの」

渉「……そうやで。串本中央に行くつもりなかったからな。せやけ、もう今は何も言わんといてくれへん、頭こんがらがる」

渉、春香の手を払い、階段を登る。

春香、渉の腕を握る。

春香「待ちんさい！それでどうすんねん」

渉「（死んだ目で）もうちよつと待ってよ」

春香、渉の発言に呆れながら、

春香「待ってくれって、あんた。……世間はそんなあんたを待ってくれんで」

渉「（馬鹿にしたように）世間って、あんた串本から出た事ないやんけ」

春香「（激昂し）なんやその発言。それで揚げ足取つとるつもり？余計外に出せんわ」

渉「（少しキレ気味で）揚げ足ちゃうわ、事実やわ。何やねん、全てこじつけて自分の言いなりにさせようとするその手法。気に食わんねん」

春香「（静かにキレながら）……オッケー、じゃあ、あなたの思うがままに生きて、学んで、食べていって下さい」

春香、渉の腕を離す。

春香「私はあなたの親なので、あなたが器用やないことは知っていますけど。どうぞ、好きに生きて行って下さい」

渉、死んだ目で春香を見る。

春香「悲しまない方法を知っているそうなので、その方法で今後、私たちの力を借りずに生きて行って下さい」

春香、渉に家から出て行くよう、手で合図する。

渉、春香の合図に従い、階段を降り、玄関で靴を履く。

渉、目元を赤くしながら、

渉「親父に言っといてくれ。生きていく為とはいえ、あんな下品な奴らに貸す方がよっぽど下品やつて」

渉、靴を履き終える。

渉「……世間はそうかもしれんけど、俺には早いねん。一日で考えくるから」

渉、玄関から勢い良く出て行く。

春香、ため息を吐き、頭を抱える。

○市道52号線（夜）

渉、傾斜のある坂道を下っていく。

○県道102号線（夜）

渉の前方に踏切が見えてくる。

渉、遮断機が上がった踏切で一時停止した後、踏切を渡る。

渉、自転車に跨りながら、俯き、悩んでいる様子。

○マーケット三好・中（夜）

店内へ入店して来る渉。一目散で、カップ麺コーナーへ向かう。

渉、カップ麺コーナーに到着する。

棚には、様々なカップ麺。

渉、陳列するカップ麺を眺める。

渉、黄色パッケージのカレー風味カップ麺と緑色パッケージのトマトバジル風味カップ麺を交互に見る。

その後、青色のシーフード風味のカップ麺を見る。

渉、ため息を吐く。

渉の背後にきみよが現れる。

きみよ「いつも悩んでいるのね？」

渉「（驚きながら）うわ、びっくりした」

きみよ「前も悩まれていましたよね」

渉「いや、悩むというか、まあそうですね」

きみよ「ちなみに何と何で？」

渉「……あのー」

○マーケット三好・中（夜）

渉、トマトバジル風味カップ麺にポットからお湯を注ぐ。

○マーケット三好・外（夜）

月に暈がかかっている。

きみよ、店脇のベンチに座っている。
ベンチの上にはシーフード風味のカップ麺、カレー風味カップ麺が置かれている。

渉、トマトバジル風味カップ麺を持ちながら、店内から出て来る。

渉、ベンチにトマトバジル風味カップ麺を置きつつ、自身も座る。

きみよ「若いっていいね」

渉「はい？」

きみよ「だって3つも食べれるんでしょ？」

渉「いや、……今日は特例というか。ていう

か、いいんですか？」

きみよ「ん？何が？」

渉「だって、お金……」

きみよ「いいの、いいの。若い子がお金を持つていないのは当たり前のことだから」

渉「でも、お金なかったら、1つにしろとか
思いませんでした？」

きみよ「……3つ食べて確かめたかったんで
しょ？それに勝るものってある？」

渉「……ありがとうございます」

きみよ「いいのよ」

○マーケット三好・外（夜）

渉の手元はカップ麺の蓋を取る。

渉「（小声で）いただきます」

渉、合掌し、カップ麺を食べ始める。

音を立てながら、麺を啜る。

きみよ、渉の食べる姿を静観する。

渉「……三好さんも食べますか？」

きみよ「私はいいいから。……あと名前、三好

じゃないのよ」

渉「……すみません、お名前伺っても」

きみよ「きみよ。きみちゃんって呼んで」

渉「……すみません、上の名前は？」

きみよ「畠」

渉「畠さん。……すみません、店名に三好が付いているので、てっきり三好さんかと」

きみよ「いいのよ、みんな最初はそう思うのが当たり前よ。私以外、私のことを三好きみよだと認識して接するのよ」

渉「でも、もう覚ええました。畠きみよさん」

きみよ「はい。……貴方のお名前は？」

渉「玉置渉です」

きみよ「渉君。可能性に溢れた名前だね」

渉「……どうでしょうね」

渉、3種のカップ麺を食べ比べる。

きみよ「……お気に入りは見つかった？」

渉「……今の所、シーフード優勢ですかね」

きみよ「シーフード。私は普通のしか食べたことないね」

渉「……食べてみますか？」

きみよ「（首を横に振りながら）年だかね」

渉「……了解です」

渉、カップ麺を啜る。

渉「きみよさんは……」

きみよ「きみちゃんって呼んで」

渉「（少し躊躇しながら）……きみちゃんは

なんでここで働いてるんですか？」

きみよ「……実は恋をしてね」

渉、きみよの発言を聞き、むせる。

渉「すみません、唐突すぎて」

きみよ「『ラブ・ストーリー』は突然に」ね」

渉「……何ですかそれ」

きみよ「……若い子は知らないのね」

渉「すみません、勉強不足で。それで？」

きみよ「……鬼怒川にバスツアーで行った時

にね出会ったのよ、三好さんとは」

渉「バスツアー。いいですね、風情あって」

きみよ「そう。あの旅行はね、今でもすごく

記憶に残っている」

渉「……やっぱ若い頃の思い出は、大人にな

った今でも忘れられないものですか？」

きみよ「……私が40時の話よ」

渉、麵を啜る箸が止まる。

渉「40歳で恋をしたんですか？」

きみよ「そうよ、40歳で恋をした」

渉「……40歳で恋をして、楽しめたんですか？」

きみよ「（微笑みながら）……そうね、私は

楽しかったわよ。隣に居たのが、歩幅を合
わせてくれる人だったから」

渉、自身の足元を見る。

きみよ「渉君は歩幅が合う人、居るの？」

渉、上を見上げる。

きみよ「（微笑みながら）居るのね」

渉「……やっぱシーフードですね」

きみよ「そう？よかったわね」

渉「……よかったねとは？」

きみよ「だって食べ比べしないと確信が持て
なかったんでしょ？渉君の解釈の出し方が
分かったのなら、よかったじゃない？」

渉「……僕、今疲れて見えます？」

渉、自身の顔をきみよに見せつける。

渉、少し肝が据わった表情。

きみよの声「……疲れている様に見えるかも知れないけど、悪い顔はしてないわよ」

○マーケット三好・外（朝）

ベンチの下で猫が日よけをしている。

○マーケット三好・バックヤード・中（朝）

ソファで寝ている渉、目をこすりながら、目を覚ます。

○バス・中

美里、窓の外を見ながら、走行中のバスに揺られている。

○マーケット三好・中

渉、きみよにお辞儀をしている。

○バス・中

窓の外を見る美里は無表情。

○国道42号線

渉、自転車で駆け抜ける。

○JR串本駅・全景

○JR串本駅・構内

白いシャツにジーンズを履いた美里、
単語帳を読み、ベンチに座っている。

渉、構内へ歩いて来て、美里の姿を見
つけると、少し表情が固くなる。

美里、渉の存在に気づき、手を振る。

渉、笑顔で美里に手を振り返す。

渉「（明るく）昨日ぶりですね」

美里「本当、よく会うね。パパより顔合わせ
ているよ」

渉の顔が一瞬硬直する。

渉「ちなみに今日は何時まで？」

美里「3時には向こうに着いたときかな」

渉「じゃーあと2時間ちよつと」

美里、スマホをスクロールしながら、
美里「そうね、行きたい所は基本的に行けた
からな」

渉、胸を摩りながら、

渉「じゃー僕の行きたい所でも良いですか？」

美里「（渉の顔を見つめ）行きたい所？」
渉「（意気揚々と）はい！行きたい所に」

○国道42号線

渉と美里、自転車を2人乗りし、山
あいの道を走っている。

渉の背後に座る美里、少し悲しい顔を
し、辺りの景色を眺めている。

○マーケット三好・外（朝）

きみよ、笑顔でベンチの下に居る猫に
餌を与えている。

○串本中学校・全景

○同・校庭

渉と美里、台車から走り高跳び用のマ
ットを下ろしている。

美里「……本当に大丈夫なの？」

渉「ん？……大丈夫ですよ」

美里「……陸部の人に怒られない？」

渉「後輩に聞いたら、今日から合宿らしいの
で、学校には誰も来ないですよ」

美里「じゃー余計怪しく見えるんじゃない
の？あの私服の奴ら誰だって？」

美里、自身の着ている服を指差す。

渉「怒られたら……それまでです。……それ
より、そっちのジョイント付けました？」

美里「まだ。今から」

渉「OKです」

渉と美里、ジョイントを接続する。

○同・校庭

バーを支柱にセットする渉の手元。

渉「……よし」

渉と美里、助走位置に移動する。

美里「（高揚しながら）いやー本当に久々だよ、飛ぶよ」

渉「安心して下さい。僕もです」

美里「これ今100だよね」

渉「そうです。流石にね、飛べますよ」

美里、大きく息を吐く。

ゆっくりとした助走から軽やかな背面

跳びでバーの上を超えて行く。

渉「（拍手しながら）やっぱり綺麗ですね」

美里「（安心した様子で）ふー緊張した。でも、いいね。久しぶりに飛ぶと」

渉、右手を挙げ、呼吸を整える。背面

跳びでバーの上を超えて行く。

渉「（高揚しながら）ふーあぶねー」

美里「（拍手しながら）いいじゃん、だいぶ余裕あったよ」

渉「いやーよかったです。これで失敗したらカッコ悪すぎますからね」

美里「（微笑みながら）確かに。誘った側だからね、次何センチいく？」

渉「とりあえず５ずつ上げていきますか」

美里「オッケー」

渉と美里、バーの高さを１０５センチに上げる。

土のグラウンドに雨粒が落ち始める。

○道の駅串本・駐車場

駐車場に停車中のハイヤー。

○ハイヤー・中

五木、スマホを触っている。

フロントガラスに雨粒が当たり、上空を見上げる。

五木「また、雨かい。最近よう降るな」

○串本中学校・校庭

グラウンドに雨粒が激しく落ちる。

美里、白いシャツが雨で濡れ、下着の

黒いキャミソールが透けて見える。

美里、雨に濡れながら飛び越えようとするが、バーを落とす。

美里「（小声で）あーくそ」

渉「……惜しいです、もうちょい」

渉と美里、落ちたバーを直す。

渉、スタート位置に移動する。

渉、バーを飛び越える。

渉「（小声で）よし！」

美里「（拍手しながら小声で）……すごい」

渉、上空を見上げる。

渉「……雨宿りします？」

美里、辺りを見渡し、

美里「いや、もう一回」

渉、美里の発言を聞き、頷く。

○ハイヤー・中

五木、スマホを触りながら、徳永英明のレイニーブルーを口ずさんでいる。

○串本中学校・校庭

渉、真顔で支柱の隣に立っている。

美里、雨に濡れながらも懸命に飛ぶ。

バーが支柱から落ちる。

美里「……もう一回いい？」

渉、無言で頷き、バーを支柱に戻す。

美里、スタート位置に戻る。

美里、息を整え、バーに向かって走り

飛ぶ。

バーが支柱から落ちる。

息を切らす美里、落ちたバーを見て、

マット上で寝転がる。

美里「（息を切らしながら）もうちょつとな
んだけどね」

渉、マットの上に正座する。

渉「……我ながら今日、ここに連れて来れて

よかったと思っています」

美里「……なんで？」

渉「いつか一緒に飛びたいって前、美里さん
言ってたやないですか」

美里「……そんな時はもうちよつと飛べると思
っていたけどね」

渉「でも僕からしたら、飛べるとか飛べない
とか正直どうでもよくて、その発言聞き逃
さんくてよかったと思いました」

美里「……仮に聞き逃していたら、どうなっ
ていたの？」

渉「……美里さんの本当の姿、知らんまま今
日が終わってました」

美里「（失笑しながら）……私のあの醜いジ
ヤンプから本当の私がかっちやたの？」

渉「……一部分だけですけど」

美里「……例えば？」

渉「……こんなにも一生懸命に跳ぼうとする
人が、投げやりでいる訳ないってこととか
ですかね？」

美里「……なるほどね」

美里、うつ伏せになる。

渉、白いシャツが濡れグレーに見える
美里のシャツを見ながら、

渉「美里さんはグレーな服しか着れへんのがなくて、今は選んでグレーを着ているのが分かりました」

美里「……違うよ、私はもうすでに怪我を負い、諦めている人間だよ」

渉「……じゃーなんでこんなに意味のないことに、真剣に飛んでいるんですか」

美里「……」

渉「……美里さんは僕と一緒に、高く飛べる人ですよ」

美里、マツトに顔を埋め込む。

美里「……でも負傷持ちだよ、私」

渉「だったら、怪我治るまで待ったらええやないですか。今は飛べんくても、飛べるようになるまで待ったらええやないですか」
うつ伏せの美里、顔だけ横に向ける。

渉、美里と目が合い、微笑む。

渉「僕、待ってますから」

美里「……どこで？」

渉「それは追々」

美里「あたかも自分が先に進んでいるみたいだね」

渉「今だけです、次は美里さんが待つ番かもしれない」

美里「確かに。……ちなみに私の下着、見えてる？」

渉「ん？……全然」

美里「（微笑みながら関西弁で）変態やな」

渉「……そんな子供ちゃうわ」

美里「確かに。私より大人だもんね」

渉「……ちよつと背が高いだけですよ」

渉と美里の間に沈黙が流れる。

渉「飛べるようになったら言って下さいね」

美里「……うん」

○渉の実家・玄関・外

ずぶ濡れの渉、玄関前に立つ。

○ベスパ南紀白浜・玄関・外

ずぶ濡れの美里、玄関前に立つ。

○ 渉の実家・玄関・外

渉、目を閉じ、心を落ち着ける。

○ ベスパ南紀白浜・玄関・外

美里、目を閉じ、心を落ち着ける。

○ 渉の実家・玄関・外

渉の手元、玄関のドアノブを握り、扉を開く。

○ 県道 34 号線

曇り空の下、山間部をハイヤーが走っている。

五木の声「最近はね、串本も観光で以前よりも賑わいが増しちゃいましたね」

○ ハイヤー・中

髭を蓄えた五木、ハイヤーを運転している。

五木「お客さん、本日はどちらからいらしたんですか？」

○ベスパ南紀白浜・全景

○ベスパ南紀白浜・寝室

短髪姿の渉、白いシャツを着て、丁寧にベッドメイキングをしている。

○ハイヤー・外

フロントガラスに雨粒が数滴落ちる。

○ハイヤー・中

髭を蓄えた五木、上空を見上げる。

五木「……雨かいな、珍しい」

○ベスパ南紀白浜・寝室

寝室に林が入って来る。

林「終わったかな？」

○ハイヤー・中

雨が強くなる音。

髭を蓄えた五木、フロントミラーをチラチラと見ながら、

林「ちなみに知っていました。雨って浄化を意味するらしいです。こう言うの聞くと、幸先いいなーと感じますよね」

○串本海中公園・海中展望塔・中

青光りの照明の下に一つの舷窓。

舷窓の先には、岩礁と元気に泳いでいるイスズミ。

(了)

